言語表現が伝える三つの情報

――語用論的分析のための一指針――

高本條治

■一　はじめに

恋人から携帯にいきなり次のようなメッセージが届いたとする。

ごめん。なんだかつかれたみたい……。

メッセージはこれだけだ。受け取った側は「これってどういう意味だろう」と考えることだろう。もちろん、このとき問題なのは言語表現そのものを解読して得られる字句通りの意味ではない。日本語を理解する受け手には「ごめん」や「なんだか」や「つかれたみたい」という言語表現そのものが示す字句通りの意味（意味論的な意味）は了解済みのはずである。

したがってここで問題となる「意味」は、そうした字句通りの意味の背後に省略または捨象されて隠れている意味や、さらにその向こう側に一歩推論を進めて初めて得られるような意味の方である。私たちが日常生活の中で「意味」という言葉を使うときには、ごく自然にそういった言外の意味にも言及していることが多い。

言語学では、言語表現そのものが表示している字句通りの意味の側面を「意味論的な意味」と呼び、文脈や状況、さらに言語使用者（表現者と理解者）の個別事情に応じた推論を経なければ得られないような意味の側面を「語用論的な意味」と呼んで区別する。すなわち、語用論的な意味は意味論的な意味を超越した位置に置かれる。

言語学での意味論は、言語表現の字句通りの意味を決定する自律的な規則や体系を取り扱う。そこではおのずと、語や文に託された抽象的・一般的・普遍的な「意味」の表示規則を明らかにしていこうとする探求姿勢が採られる。それに対して語用論では、言語表現を用いた実際のコミュニケーションの中での具体的・個別的・限定的な「意味」の導出を問題にする。その意味導出の背後に働く人間臭い原理や原則を見いだそうとする探求姿勢を採るのである。

むろん、意味論が扱う「意味」と語用論が扱う「意味」は分断されているのではなく連続関係にある。言語表現によってもたらされる「意味」の総体を明らかにする上で、意味論と語用論とは補完しあう関係になくてはならない。換言すれば、「意

味」という用語は、今後も意味論が扱う狭義の「意味」から語用論が扱う（そして一般の人々が慣用的に用いる）広義の「意味」まで、広範な内包をもつ用語として留保しておいた方が無難であろうと思われる。

とはいうものの、「意味」という語に広範な内包をもたせた場合、この語を修飾語や限定条件なしに用いると収拾のつかない事態を招いてしまうことになりかねない。だからといって、「意味論的な意味」とか「語用論的な意味」と常に修飾語によって限定しなくてはならないのも煩わしい。「語用論的な意味は意味論的な意味から区別される」というような言明が繰り返されると、専門家であっても頭が痛くなってしまうことだろう。

そこで小論では、言語表現がその使用者にもたらす「意味」を、言語表現が伝える三つの「情報」として分類することを提案したいと思う。そうすることで、言語哲学における（論理実証主義と日常言語学派の拮抗対立にさかのぼる）語用論展開の歴史的事情や、その出自に由来する独特の用語に詳しくない人でも、言語表現に対する語用論的な分析手法に自然となじんでいけるような道具立てを一つの指針として提示することが小論の目的である。

そうした目的に沿って、小論では理論的な厳密さではなく、実践的な有用性に重きを置きたいと考える。ここで提案する考え方は、語用論ないしはその関連領域の先行研究から多大な影響と恩恵を蒙っているが、小論ではあえてそれらへの細々とした参照を行わないことにした。いずれ別稿において、小論の考え方が従来のどのような先行研究の成果に立脚したものであるかは明らかにする予定である。

■二　言表情報・言外情報・実演情報

では再び、先ほど掲げたメールの事例に戻ろう。恋人から届いたメッセージは次の通りであった。

ごめん。なんだかつかれたみたい……。

前述の通り、二つの文から成るこのメッセージの字句通りの意味を解読すること自体は、日本語を理解する受け手にとってはいとも簡単である。字句通りの意味とは、すなわち、言語形式そのものの内に託された情報のことであるといってよい。「情報」はもちろんinformationの訳語であるが、小論ではこのinformationという用語を、知覚可能な形式（form）の内（in）に現に表示されている意味内容を指す場合に局限して用いたいと思う。以下、この用法でのinformationを「言表情報」と呼ぶことにする。言表情報（information）とは、表現者が言語形式として具現した意味情報であり、理解者が言語形式を解読することによって得ることのできる意味情報のことである。

仮に言語コミュニケーションにおける情報のやりとり（伝え合い）がこの言表情報の次元に留まっているのであれば話はかなり単純である。しかし、実際にはそうではない。例えば、「ごめん」は謝罪の言葉である。「ごめん」と書かれている以上、恋人は自分に対して何かを謝っている。はたして恋人は何を謝っているのだろう。何が「ごめん」なのだろう。私たちが実際に行っている理解は当然そうした方向へと推論が向かう。

あるいは、「ごめん」の直後には「なんだかつかれたみたい」という文が続いている。「つかれた」の主体はメールの差出人である恋人本人であろうが、はたして恋人は何に「つかれた」のだろう。それは肉体的な疲労を指しているのだろうか、それとも、精神的で心理的な疲労感を指しているのだろうか。

このような問題は言表情報の次元では解決できない。そもそも「つかれた」の主体が恋人本人（すなわち潜在している「わたし」）であるという理解自体、言語形式としては表現されていない情報をすでに補っていることに注意が必要である。つまり、これは知覚可能な形式（form）から除外（exclude）されていた想定内容であり、それゆえ、受け手が得られた言表情報に対して拡張（expand）しなくてはならない想定内容である。

そこで小論ではこれをinformationに対してexformationと呼びたいと思う。exformationの訳語としては「言外情報」を当てる。言外情報（exformation）とは、表現者が言語形式としては具現しなかった想定情報であり、理解者が言表情報をより確定的なものにするべく推論によって導出する想定情報である。

恋人からのメッセージがメールで届けられた受け手は、さらにその恋人の表現態度や表現姿勢について疑念を抱くかもわからない。例えば、「つかれた」と言い切らないで「なんだかつかれたみたい」とあやふやな表現態度をとっているのはなぜだろうとか、「なんだかつかれたみたい……。」という文の末尾に置かれた「……」は何を示しているのだろうとか。

メールであるから声や表情は伴っていない。もし声や表情が伴った対面コミュニケーションであれば、この「ごめん」がシリアスで重い「ごめん」なのか、それとも多少のんきで軽い「ごめん」なのか、その見極めぐらいならその場で何とかつきそうなものだ。したがって、声や表情、あるいは、身振り手振り、相手との物理的距離などは、言語コミュニケーションにとってかなり重要な役割を担っている。

そうした、対面コミュニケーションであれば声や表情などによってもたされる情報は、文字によって伝送されるメールの文面からはおおむね脱落してしまう。ただ、「……」「！」などの符号を用いたり、「(笑)」「(汗)」などの注記を挿入したり、「(^_^)」「(^_^;」などのフェイスマーク（顔文字）を使用したりすることで、その一部を代替することはできる。

小論では、この種の情報を一括してperformationと呼ぶことにする。performationは、言語表現行為というperformance(実演・遂行)に伴うさまざまな関連情報のことを指し、訳語としては「実演情報」を当てる。実演情報(performance)とは表現者が言語形式を物理的に具現する際にそれと並行して顕示する付随情報であり、理解者が表現者側の態度や姿勢を伺い知るために利用する（言語形式としては構成されていない）付随情報である。

実演情報は伝送媒体の影響を大きく受ける点に注意が必要である。相手とじかに対面しているケースに比べて、音声電話で通話するケースでは、聴覚によって得られる実演情報以外はすべて欠落する。メールでやりとりをするケースではさらに実演情報は大きな制限を受ける。ただ、符号や注記やフェイスマークなどを補助的に使用することによって、欠落した実演情報の手がかりを部分的（かつ意識的）に残すことはできる。

以上のように考えると、私たちは言語表現を媒介とするコミュニケーションの中で次のような三種類の情報の授受を行っていることになる。表現者は、自らが構成した言語形式によって言表情報(information)を表示しつつ、それ以外の言外情報(exformation)は相手の推論に委ね、表現行為に伴う実演情報（performation）によって自らの姿勢や態度を相手に顕示する。一方、理解者は、表現者が具現した言語形式から言表情報（information）を解読しつつ、それ以外の言外情報（exformation）は推論によって導出し、表現行為に伴う実演情報（performation）によって表現者の姿勢や態度を伺い知る。

■三　文字媒体コミュニケーションの語用論的特性

ここでもう一度、恋人から届いたメールの例に立ち戻って、メールを用いたコミュニケーションに見られる語用論的な特性について確認してみたい。

ごめん。なんだかつかれたみたい……。

メールの場合、恋人がこの文面を作成したときにどのような状況にあったのかを受け手は知ることができない。例えば、家の掃除や片づけに追われてへとへとになっているという恋人の状況が事前に了解されていれば、「つかれ」の原因はそうした過重な家事労働に起因しているのだろうという判断が下しやすくなる。つまり、表現者がそのとき置かれた状況がどういうものかについての了解があれば、言外情報への推論が一定の範囲に誘導されやすくなるということである。

今度は、この恋人とその日の夕方にデートする約束を交わしており、その約束を二人とも忘れていないというケースを仮定してみよう。メールがその約束の時刻に先立って届けられたものであれば、「ごめん」という言葉は、約束した時刻に約束した場所に行けなくなったということへの謝罪を意図したものであると考えやすくなる。さらのその恋人がその日のうちに仕上げなくてはならない急ぎの仕事を抱えており、そのことが事前に恋人から知らされていたとするならば、その仕事のせいで恋人は疲れきってしまったに違いないという推論を導きやすくなる。この場合も、事前の相互了解事項があることによって、言外情報の導出に必要なコストを抑えることができる。

しかしここでは、恋人との間にそうしたデートの約束もなく、また、急ぎの仕事を抱えているという知らせも恋人からはなかったという状況を考える。「ごめん。なんだかつかれたみたい……。」というメッセージが不意にメールで届けられたと仮定してみるのである。その恋人がいったいどういう状況の中でこの文面を書いたのかも受け手にはわからない。こうした場合、前述の通り、受け手はおそらく「これってどういう意味だろう」という問に直面せざるをえない。

その問にすぐに答が出せなければ出せないほど、さまざまな疑念や心配が連鎖的に発生する。『……』に込められた意味は何だろう？」「どうしてこんな謎かけのような書き方をするのだろう？」と、恋人の表現態度にいらだつかもわからない。

「……」という符号によって特徴的に示される実演情報によって曖昧さを残す表現姿勢だけが顕示され、その結果として確定的な表現意図は隠蔽されている。そのため、「いったいどういうつもりなんだ!?」「結局、何が言いたいんだ!?」と、結局は恋人の真意がわからず途方に暮れてしまう。

実際、恋人は自分に謎かけをしたのかもわからない。しかし、それは自分の思い過ごしで本当はそうでないのかもしれない。判断の揺れるところである。もちろん、メールを用いたコミュニケーションは双方向的なので返信のメールで問い返すことは可能だ。問い返すという行為を通じて、恋人がこのメールのメッセージに託した、しかし言語表現そのものには十分に示されていない真意を対話の中で探ることは重要であろう。だが、どのように書いて返信すればいいものか。そこでまた遅疑逡巡が生じる。かくして、恋人からのメッセージが重大な解釈課題であるのと同様に、それに対する返信も、はたしてどう対処すればよいのか困惑するという点で重大な表現課題となる。

「それってどういう意味?」とメッセージ全体の意図を包括的に確かめるべきだろうか。おそらくこのとき問題となるのは、「なんだかつかれたみたい……。」という感懐が、どういう筋道で「ごめん。」という謝罪の言葉に結びつくのかという問題だ。言語学の用語を用いれば二文間の結束性（cohesion）の問題であり、また、このメッセージ全体の一貫性（coherence）の問題である。「(あなたとの関係に) なんだかつかれた……。(だから、もう二人の関係は終わりにしたい。だから)ごめん。」というネガティブなシナリオを言外情報として想定した受け手であれば、自分の解釈を引き合いに出した返信を書こうとするかもわからない。しかし、そうした場合であっても、あくまで「それって別れたいって意味?」という問い掛けの形式か、(もう少し積極的に)「それって別れようということだよね。」という同意を求める形式を採らざるをえないだろう。表現者の意図が隠蔽されている限り、理解者側の解釈はひとつの可能性でしかない。

恋人がメッセージに込めた意図に関する、こうした包括的な問い方や確かめ方とは別の尋ね方もある。例えば、「『ごめん』って、何が『ごめん』なの?」とか、「『つかれた』というのは二人の関係のことを言ってるの?」という尋ね方だ。これらは局部的な言外情報に関する問であるが、結局はそうした部分的な問に対する答の出し方が調整され総合された結果、メッセージ全体の意図が包括的に導かれる。したがって、部分を問うことは、全体を問うことにつながっているわけだ。

さらに事態をややこしくするのは、問い返してみたとしても、相手の恋人からきちんとした答が返ってくるかどうかはわからないことだ。ところがその一方で、問い返しを行った場合、相手の意図が自分の方ではきちんと把握できていないという事実だけは相手に伝わってしまう。つまり、問い返しをするということは「何を伝えたいのかよくわからなかった」という証拠であり、「言いたいことがあるならもっとはっきり言ってほしい」という明白な要求となる。このことはコミュニケーションに障害が起きているという事実確認と事後処理とを相手に迫ることでもある。

これがメールではなく、目の前に恋人がいる状況でその恋人が口にしたせりふであったなら、言われた側はもう少し気楽に

その恋人に対して問い返すことができるかもしれない。対面コミュニケーションの場合は、相手の表情をうかがいながらその問に対する答を待つことができるので、「いまの尋ね方はまずかったみたいだな」と感知すればすぐに軌道修正を図ることができる。目の前に並んだ料理の話題に切り換えたり、部屋のテレビをつけてそれに集中しているふりをしたりして、場をつくろうこともできる。

しかしながら、メールでは相手の表情を伺い知ることができない。知覚可能な実演情報が決定的に不足している。明示的に与えられる情報は相手から送られてくる文字や符号によって構成されたメッセージだけである。どうしてもそこに書かれている内容に意識は集中せざるをえない。そのため、話を逸らすことも容易ではない。場を取り繕おうにもそもそも同じ場が共有されていない。

対面コミュニケーションとメールによるコミュニケーションとではタイムラグの発生のしかたも異なる。メールの場合には、こちらがメッセージを送信したあと、相手から返信が来るまでにどうしても一定の時間差が生じる。この時間差が曲者である。先方から即座に返信があった場合には、相手の関心の高さを示していると判断できる。しかし、それがプラスの情動を引き起こすか、マイナスの情動を引き起こすかはケースバイケースであろう。長い待ち時間の末にやっと返信が届いた場合もまた、その時間差に見合っただけのニュアンスが当然発生する。メールのやりとりにおいては、返信が届くまでのタイムラグは表現態度や表現姿勢を伺うための重要な実演情報とみなされる可能性があるということである。

このような状況は、何も恋人同士のメールのやりとりに限ったものではあるまい。これだけメールによる相互連絡が急速に進展した今日、これと同じような課題的状況に置かれた経験のある人は少なくないだろう。特に親しい者同士でのメール利用は、対面コミュニケーションや電話によるコミュニケーションに限りなく近い意識(ならびに言語表現スタイル)を伴っていることが多い。しかし、その一方でメールはあくまでも文字使用を媒体基盤としたコミュニケーションである。音声媒体を用いたコミュニケーションで聞き落としや聞き漏らしや聞き誤りが発生するのと同様、文字媒体のコミュニケーションでも見落としや見過ごしや見誤りは起きる。だが、音声信号は録音でもしておかない限りすぐに消失してしまうのに対して、メールは文字として固定されているため、消去しない限り何度でも読み返すことが可能である。

読み返すということは、そのたびに情報処理が改めて行われるということだ。すなわち、読み返すたびに、表現された言語形式から言表情報が取り出され、表現としては顕現していない言外情報が推論によって導出され、なにがしかの手がかりに応じて実演情報が思い浮かべられる。音声媒体による同期的なコミュニケーションと文字媒体による非同期的なコミュニケーションの差はまさにここにある。知覚素材としては同じ文字表現であっても、それを処理するひとの注意や関心の向け方がそのつど同じであるとは限らない。二度目に読むとき、最初に得られた情報処理のあり方とは別の道筋を進むことも十分に考えられる。その結果、同じ個人の内部でも同じ言語表現に対して別

の解釈が思い浮かべられることがある。複数の解釈候補が不協和な関係にあるとき、当然そこに葛藤が生じる。

このようにメールによるコミュニケーション、ひいては、文字媒体による言語コミュニケーションには、音声媒体による同期型のコミュニケーションとは情報処理の上で異なった語用論的特性がある。そのため、両者の間には、たとえ同じ言表情報が受け手に与えられたとしても、言外情報の導出のしかたや、実演情報の入手のあり方におのずと差が生じることになる。

■四　言表情報（information）をめぐる問題

前節までは架空の短いメールを例に挙げて、小論が提唱する三種類の情報（言表情報・言外情報・実演情報）の区別を紹介するとともに、文字媒体による言語コミュニケーションの特性について見てきた。本節からは銀色夏生の短い詩作品を例に挙げながら、文字媒体によって表現された詩を解釈する際に、この三種類の情報がどのように処理されているのかを具体的に見ていきたい。

本学に赴任して以来、学部でも大学院でも必ず詩の解釈を行う「国語学」の演習授業を開講してきた。学期初めに必ず受講者に了解を求めるのは、分析資料として文芸作品としての詩を取り上げるが、それは文学研究や文芸批評や芸術鑑賞を目指しているわけではないという点である。詩作品を取り上げるのは、あくまでも語用論的な探求姿勢を受講者一人ひとりが自覚的に啓発していくうえで有効であると判断しているからである。同じことは小論についても言える。

語用論的な探求姿勢とは、ひとことで言えば寛容さを維持することであると言っていい。寛容な態度を保ちながらさまざまな可能性に開かれた観察や省察を行い、優先度を決定する尺度や基準を（絶対化・固定化しようとするのではなく）相対化・流動化させるのである。このことは、常に判断の不確定性を伴う。また、そのつど得られる結論は常に暫定的であり、絶えずキャンセルされる可能性を内包している。議論は抽象化・一般化・普遍化の方向ではなく、えてして具体的・個別的・限定的な水準に留まる。

以下の議論もまさにその水準でしかないことをあらかじめお断りしておきたいと思う。これから取り上げる三編の詩作品はいずれも、本年度（二〇〇五年度）の学部三年次学生向けの「国語学演習」の授業で受講学生たちに解釈を議論してもらった作品である。どの作品についても学生たちからは多様な解釈のあり方が指摘された。以下の記述は、そのときに学生たちが熱く交わしてくれた論戦がベースになっている。

まず最初に取り上げるのは次の詩作品である（丸付き数字は高本による行番号。以下同様）。

声　　銀色夏生

① 激しく降る雨に似ている
② 私の胸の中で
③ 大声で叫んでる
④ この声はなに

人が来ると　⑤
ぴたりとやむのよ　⑥

特に難解な語が使われているわけでもないので、一見、この詩の言表情報は誰にとっても揺れがないかのように思えるかもしれない。しかし、学生たちの議論では、第①行の取り扱いがまず問題になった。

まず表現構成上は、第①行を単独の文として認定するのか、それとも連体修飾語として認定するのかという問題がある。さらに第①行が連体修飾語である場合、具体的にどの名詞を修飾するのかという点で見方は二つに別れた。一つは第②行の「胸」を修飾するという見方であり、もう一つは第④行の「声」を修飾するという見方である。

文の認定ということに関しては、第③行の述語句「叫んでる」についても問題となった。ここで文が成立しているという見方と、「叫んでる」は次の第④行「声」を修飾する連体機能を担っているという見方がやはり対立した。

こうした問題は、表現された言語形式を解読することによって取り出される言表情報それ自体が、すでに語用論的な判定の対象なのだということを示唆する。この詩では文の終わりを示す句点や（それとの対比において）文の途中であるということを示す読点が一切打たれていない。そのため、文構成上の文法的な曖昧性が発生している。曖昧性とは複数の解が併存している状態である。どの解を選択するかに応じて、言表情報は当然違ったものとなる。

さらに重要なことは、潜在的な可能性があるすべての解を網羅的に洗い出し、リストアップされた全候補を比較検討した上で一つの解が最終的に決定されるというプロセスをとっている学生はほとんどいないという点である。例えば、第①行の「激しく降る雨に似ている」が第②行の「胸」に対する連体修飾語であると解釈した学生は、（その解釈が最初に得られたがゆえに）同じ部分が第④行の「声」に対する連体修飾語になりうる可能性があるということになかなか気づけなくなってしまう。つまり、たとえ暫定的であれ何らかの解が得られると、それ以外の別の解を求める方向にはなかなか進んでいかないということである。

さらにこの詩では、第⑤行に出てくる「人」は「私」にとってどういう人であるのかという点で、学生たちの解釈は二つのグループに分かれた。一方の学生は「人」を「他人」の意味で取った。すなわち、特定の人を除いたそれ以外の人間すべてである。それに対して、もう一方の学生は「人」を「（ある条件を満たした）特定のひとりの人」であると見なした。その条件とは「私」がその人を強く待ち望んでいることであり、それゆえ、この解釈をとる学生は「人」を会いたくて焦がれている恋人のことだと見なす傾向が顕著だった。

「人」に対していわゆる「定」の取り扱いをして特定の人物を示していると見なすか、逆に「不定」の取り扱いをして不特定の人物を示していると見なすか。この違いは、言表情報の取り出し方の差に起因している。さらにこれは指示対象をどのように想定するかという問題へと絡んでいく。

ここで強調しておきたいのは、表現された言語形式を解読することで取り出される言表情報といえども、自動的に決定されるのではなく、複数の候補が（潜在的にであれ）併存する場合はそれらの候補群からの選択や絞り込みが必要となるという点である。つまり、言表情報を取り出す段階で、すでに語用論的な解釈のせめぎ合いが発生するということである。その点で、言表情報は意味論によってただちに決定されるのだと見なすことはできない。

■五　言外情報（exformation）をめぐる問題

次に、言外情報の捉え方が問題となった別の詩作品を取り上げてみよう。

あの夜　　銀色夏生

ことばが集まってきたの　①
からだじゅうから　②
急に　③
そして　④
口からでたの　⑤
驚いたのは私よ　⑥

第①行に「ことばが集まってきたの」とあるが、この詩の中にはいったいどのような内容の「ことば」なのかを示す（あるいはその手がかりとなる）言語表現はない。したがって、その部分は解釈する側の推論や想定に委ねられているとみてよい。

学生たちの捉え方は大きく分けて二通りあった。一つは「口からでた」ことによって自分も相手も〈ハッピー〉な気分になれる「ことば」であるという捉え方であり、もう一つはそうすることによって自分も相手も〈アンハッピー〉な気分になってしまう「ことば」であるという捉え方である。それに応じて第⑥行の「驚いた」の心理的内実も当然変化する。

ここで重要なことは、この詩に対する学生の解釈としては、「口からでた」のが独り言であったという捉え方は皆無であったことである。受講学生はすべて、口からでた「ことば」は特定の相手に対して発せられたものだと捉えた。しかも、その相手は通りがかりの不特定人物などではなく、「私」にとってかけがえのない人物であり、なおかつ、「私」との間に何らかの心理的な葛藤のある人物であるという。多くの学生がこの詩でも恋愛関係にある相手を想定していた。この場合、第⑥行の「驚いたのは私よ」という分裂文による表現が、「驚いたのは（あなたではなく）私よ」や「驚いたのは（あのひとではなく）私よ」というように、自分（「私」）と対照される誰かを想定させやすいのだと考えることができる。

さらにまた、「ことば」はいったいどこに「集まってきた」と考えるべきなのかという点について、第⑤行の「口」であるという見方と、この詩の中には出てこないが、「私」の心であるという見方とが対立した。集まってきた先が「口」であると捉えた学生は、その「ことば」を相手に向けて発するべきか否

かを判断することもできないまま、無意識のうちに声になってしまったのだと主張した。一方、集まってきた先が「私」の心であると捉えた学生は言うべきか否か迷いに迷ったが、ついに我慢しきれなくなって「口」から出してしまったのだと自説を披露した。

第①行の「ことば」はどんな内容であったのか。「集まってきた」先はどこなのか。「口からでた」ことばは誰に向けられたのか。こうした問に対する確定的な答はこの詩の中には表現されていない。しかし、そうした問を当然発生させるようにこの詩の表現は構成されており、そうである以上、この詩の表現に注意を払う読者は、それらの問に対する答となる想定を導出する方向で解釈を行うように動機づけられている。

言外情報はこのようにして元の言語表現（より厳密にはそこから取り出される言表情報）によって動機づけられた推論成果としてもたらされる。その動機づけには当然強弱の差がある。注意深い読み手は微弱な動機づけに対しても敏感に反応するだろうが、逆に強い動機づけがあってもそこから発生する問（解釈課題）に対して常に決定的な答を出さなくてはならないというものでもない。問は明確に自覚されるが、答については留保し、先送りし、あえて確定しないで不安定なままにしておくという処理の（決着ではなく継続の）しかたもある。特に詩などの文芸作品の解釈においては、そうした処理のしかたが、いわゆる詩情（ポエジー）の誘因となるような漠然性への自覚をもたらすこともある。

■六　実演情報（performation）をめぐる問題

最後に、実演情報に関して議論が錯綜した詩作品を取り上げることにする（この詩では空行にも行番号を振っている点にご注意願いたい）。

どうしても　　銀色夏生

① どうしても
② と
③ きいた時
④ あなたはとても悲しそうだった
⑤
⑥ だから
⑦
⑧ どうしても
⑨ と
⑩ 答える時
⑪ 僕は
⑫ こころを
⑬ まっ白にしなければならなかった

まず、言表情報に関して、第③行の「きいた時」の動詞「きく」が「耳にする」という意味での「聞く」なのか、「問い尋ねる」という意味での「訊く」なのかが解釈上対立した。第⑩

行に「答える」という動詞が対照的に表現されていることから、数の上で優勢な捉え方は「訊く（問い尋ねる）」の方であったが、「聞く（耳にする）」の方を選ぶ学生も複数名いて、相互に熱い議論が交わされた。

この部分の捉え方は、「きく」という動詞に関する言外情報の想定の仕方と連動している。「聞く」タイプの解釈では「きく」の動作主体は「あなた」となる。つまり、『どうしても』と（僕の口からあなたが）聞いた時」という解釈が行われるわけである。一方、「訊く」タイプの解釈は二通りに別れた。『どうしても』と（僕があなたに）訊いた時」というパターンと、『どうしても』と（あなたが僕に）訊いた時」というパターンの両方が学生からは出された。

さらに、この問題は第⑩行の「答える」という動詞の言外情報の想定とも連動する。「（僕があなたに）訊いた」という捉え方をする学生は「（あなたが僕に）答える」と捉え、「（あなたが僕に）訊いた」という捉え方をする学生は「（僕があなたに）答える」と捉えることになる。

第①行と第⑧行には「どうしても」という同じ言葉が繰り返されているが、「訊く」タイプの解釈では第①行は「どうしても？」と相手に尋ねることになるし、第⑧行は「どうしても！」と相手に答えることになる。それに対して「聞く」タイプの解釈ではどちらの「どうしても」も「僕」の発言であると見なされ、それは（この詩には表現されておらず、したがってそれ自体が言外情報として想定されなくてはならないような）「あなた」から発せられた何らかの問に対する一つの「答え」であるとされる。

また、こうした解釈のあり方とさらに連動して、第①行の「どうしても」という表現のあとにどういう言葉が続きうるのか、第⑧行の「どうしても」の方はどうなのかという問題が出てくる。これもまた言外情報の想定に関わる解釈課題である。「あなた」と「僕」の関係をどのように捉えるか、どんな人間関係だと想定するかに応じて、それぞれの「どうしても」の後にどんな言葉が続くのかという想定自体も変化する。やはりこの詩でも「あなた」と「僕」とが（別れが迫った）恋愛関係にあるという解釈が最も多かったが、（子どもが反抗期にある）父子関係、（一方が病床にある）夫婦関係など、それ以外の解釈も見られた。これらは第④行の「とても悲しそうだった」の心理的な内実や、第⑫・⑬行で「こころを／まっ白にしなければならなかった」と表現されている「こころ」の状態をどのように具体化するかによって解釈が影響を受けるようである。

以上のような込み入った解釈パターンの多様な分布は、いかなる実演情報を第①行の「どうしても」と第⑧行の「どうしても」に仮想的に付与するかということと直接関係している。例えばこの詩を声に出して朗読すると想定してみよう。第①行と第⑧行の「どうしても」は、それぞれ「あなた」の声で発するべきか、それとも「僕」の声で発するべきか。また、第①行の「どうしても」は上昇調の音調を伴わせるべきか、あるいは、下降調にすべきか。ここで大切なことは、言表情報・言外情報・実演情報の処理が互いに連動し合っているという点である。

もうひとつ、実演情報という観点から重要なことがある。それは詩における改行と空行（行空け）の問題である。例えば、

第②行と第⑨行の助詞「と」はいずれもそれぞれ単独で行をなしている。つまり、その前後で改行されている。こうした視覚的な文字配置はどのような実演情報に結びつくのであろうか。また、この詩では第⑤行と第⑦行は空行である。単独で一つの行をなす第⑥行の接続詞「だから」は、両方から空行に挟まれている。こうした空行はいかなる実演情報を担っていると見なせばよいのであろうか。

こうした問題は、例えば上演用に書かれた戯曲作品を俳優が舞台で演じてみせるような場合には必然的に注意が向けられることだろう。文字媒体で記された戯曲作品のせりふを舞台で演じるとき、俳優はせりふによって言表情報を伝えるだけでなく、舞台上のどんな位置に立ち、どんな声や表情・まなざしで、どんなや身振りや手振りをしながら、どこの誰に向かってそのせりふを発すればいいのかを入念に稽古する。

しかし、文字で記された小説や詩などの文芸作品を黙読するような場合であっても、実演情報に結びつくさまざまな視覚的手がかりが本文中に表されていることがある。それを基にして、どれほど豊かな実演情報を引き出していけるか、思い浮かべることができるかということは、文芸作品の解釈においてかなり重要な部分を占めるはずである。

■七　おわりに

小論では、語用論的な意味を捉えていく上での一つのガイドラインになることを目指して、言語表現が伝える三つの情報（言表情報・言外情報・実演情報）の区別を提案した。音声媒体の同期型コミュニケーションと、文字媒体の非同期型コミュニケーションとではそれぞれの情報処理のあり方に差がある。そのため、例えばメールのやりとりでは直接対面したやりとりとは異なったところで理解や表現の困難さが発生する。

また、詩のような文字媒体による文芸作品を解釈する場合、言表情報・言外情報・実演情報のそれぞれの情報処理のあり方が、いずれも多様な解釈を発生させたり解釈のせめぎ合いをもたらしたりする要因になっていることを事例報告的に指摘した。その中で、言表情報の取り出しにも語用論的な判断を必要とすること、言外情報の想定には言表情報と実演情報とが連動して絡んでいること、実演情報は文字媒体の言語表現においても注意を払う必要があることなどの諸問題に触れてきた。

しかし、その一方で小論では触れることができなかった問題も山積みである。小論が取り扱った問題は実は「関連性理論（Relevance Theory）」で言うところの「表意（explicature）」の範囲におおむね留まっている。そこから一歩先に進めた文脈推論の前提や帰結である「推意（implicature）」の問題は〈言語表現が伝える情報〉という枠組みではなく〈言語表現に基づく情報〉として整理していくつもりである。そこでは「合成情報（conformation）」「変成情報（deformation）」「再成情報（reformation）」という三種の情報区別が行われる予定であるが、詳細は別稿に譲ることとしたい。

（本学教員）